

ピウスツキの業績：博物館学の実務家及び理論家としてのプロニスワフ・ピウスツキ

著者	アントニ クチンスキ, 井上 敏昭
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	005
ページ	123-129
発行年	1987-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00003755

博物館学の実務家及び理論家としての

ブロニスワフ・ピウスツキ

アントニ・クチンスキ*

(井上 紘一**訳)

ブロニスワフ・ピウスツキの社会人類学の分野における学術的業績は次の6種の問題群へ区分することが出来る。1) サハリン原住民の歴史、2) 原住民医療の諸問題、3) 宗教、慣行、習慣、特にシャマニズム、4) 神話、伝説、歌謡、詩と言ったフォークロア、5) 言語学、6) 実践及び理論の両面における博物館学。けれどもその何れもが等しく公刊され、総合的評価が加えられているわけではない。

ここでとりあげる博物館学の領域における彼の仕事は、実務家及び理論家の両面にわたっているが、これまで余り注意が向けられて来なかった問題群の一つである。その理由は、彼の流刑生活とこれに関連する身辺の不安定さ、生活の場の絶え間ない移動、恒常的な貧困、ひいてはパリにおける悲劇的死亡(1918)と多岐にわたっている。かくて、彼の既刊著作の総合目録すら出来ていない実情のもとで、私はそのための調査を実施するうちに新事実と遭遇し、時には驚くべき発見をする事にもなった。同じ事は、彼の蒐集したアイヌやオロッコやニヴフの文化財である博物館収蔵品についても言うことが出来る。また同じ事は書簡類を含む手稿コレクションについても、最後には画像資料、即ちサハリン原住民文化を記録する写真についても言える。

ところで、ピウスツキは原住民の利益の卓越した代弁者でもあった。彼は抑圧されたアイヌやニヴフを常に擁護し、日常活動で彼らを助け、衛生、家計、農耕の基本原則を彼らに教え、土地を耕作する事を奨励した。彼は当局者に向けて執筆した覚書の中で、当局者が原住民文化を尊重し、サハリンの被抑圧民にたいしては物質的援助を与えるよう要求した。彼は又医療的関心の欠如、原住民の暴飲助長、非人道的取扱を非難した。彼はパリ人類学会の会員に対して行った講演(1909)で、滅亡の淵にある極東の諸民族に対してヨーロッパの科学が支援の手を差し延べる緊急の必要性を訴えた時に、この人道的態度を力説していた。情熱的ではあるが、同時にまたつらそうに彼

* ポーランド民族学会

** 中部大学国際関係学部 本館共同研究員

は次のように語ったのである。「紳士諸君、今暫くお耳を拝借して、私が自然児の間で暮らした時に取りつかれた考えを述べさせて頂きたい。私たちは彼らの過去に関心を持ち、その微に入り細を穿って研究するけれども、彼らの未来に対しては殆ど全く気を配らない。私は、やはり苦悩する国の一員として彼らの絶望の深さを感じました。私は、これらの民族の問題に関心をもたれる科学者たちの注意をこれら民族の運命へ向けさせる事を自らの道徳的義務と致しました。人間に関する研究に他に先がけて着手されたパリ人類学会が、そしてまた偉大にして高貴なる理念を数多く生み出したフランスの人類学会が、必ずや自ら率先して全ての善意の人を導かれるであろう事を信じて疑いません。これは人類の情念に根差すわれわれの義務であり、われわれが実行せねばならない救命行為なのであります。」

原始的人種や民族に対するピウスツキの態度表明に触れたあとで、アイヌのもとで暮らしていた間中、彼が実際に彼らの利益の擁護者だった事は強調するに値する。彼は彼らと親しくなり、彼らの厳しい生活条件、慣行、信仰を知り、彼らの年代記作家ならびに代弁者となった。彼は彼らに菜園作りや魚の塩漬けを指導し、天然痘の接種と治療を行い、衛生と教育を普及させた。このお蔭で彼は人々から全幅の信頼を得、また或る部族は彼をメンバーに加えて「兄」と呼んだ。と同時に、彼はフォークロア資料を蒐集し、信仰や儀礼、生活様式、行動を観察したのである。

彼はまた、サハリン博物館の設立に協力し、そのコレクション入手を手配し、ヴラヂヤストークやペテルブルグの博物館に対して行っていたように、民族標本を納める事もした。収蔵台帳や収蔵カードの記載から分かるように、ヴラヂヤストークの博物館は彼のお蔭で収蔵品を645点増やし、ペテルブルグの博物館は1,237点を獲得した。今日では、これらの標本が抜群の保存状態でレニングラードのソ連科学アカデミー民族学研究所の博物館【人類学・民族学博物館】に収蔵されており、また一部はヴラヂヤストークにある。ピウスツキはアイヌ・コレクションをポーランドへも持ち帰ったが、それは戦争中の1939年に焼けてしまった。そのコレクションには、小屋やソリの模型、玩具、シャマンの手太鼓、儀礼用の品物、普段着、儀礼用衣服、楽器、狩猟具、漁撈具、崇拜及び民間医療の対象物、換言すれば、非常に豊富な文化財が含まれていた。ピウスツキがこれらを入手した方法は二通りある。一つは贈り物としてであり、今一つはなげなしの自己資金を叩いて購入したものであった。標本の多くは、例えばヴラヂヤストークの博物館の例のように、彼自身の手でカード化しており、採集地、状態、用途が個別に記載してある。ピウスツキはロシア帝室地理協会アムール支部によってヴラヂヤストークへ身柄を引きとられ、1899—1903年の間この博物館の主事と

して働いた。彼は自分の集めた博物館の蒐集品を科学的に記載し、体系的に整理し保存し、カタログ化を進めた。彼は一般民族学の研鑽を積み、民族誌及び人類学の知見を広めつつ、熱心に働いた。ヴラヂワストーク時代のピウスツキは二種の定期刊行物の共同編集者であり、ロシア帝室地理協会現地支部の書記であり、パリで開かれた万国博覧会(1900)のためにアイヌ・コレクションを準備した。このコレクションは大好評を博し、国際審査員によって銀賞が授与された。このためロシア地理協会は彼へ、極東における彼の学術活動全般を対象とする銀小牌を贈った。

ピウスツキはアイヌ及び他のサハリン原住民文化の全貌を記録する事を企図しており、「熊祭」、シャマニズム、民間医療と言った現象を記述する際は、しばしばカメラを用いた。彼は人類タイプ、集落、衣服、住居とその備品、シャマン儀礼や「熊祭」に関わる風景等、1000枚以上の写真を撮影した。それらの写真の一部は、ロシア、ポーランド、ドイツのさまざまな雑誌に掲載され、正当な関心を喚起しつつ、世界中を駆けめぐった。この画像資料はピウスツキの刊行した著作物を大いに補完し、アイヌ文化財の優れた記録となっている。写真に示される事実や出来事が地上には最早存在しないため、その価値は誠に特異なものである。消滅は人口減少の結果だが、これは北海道のアイヌやアムール流域のニヴフにとって典型的な現象だった。遺憾ながら、我々は今のところこの画像作品の全容を記録出来ていない。それはソ連、ポーランド、東ドイツのさまざまな学術機関に散在しており、恐らくは、ピウスツキが求職のために渡り歩いた他の国々にもありえよう。従って、これらの写真の完全なリストを作成するためには、いかなる努力も惜しんではなるまい。ICRAPによって編集作業が進められている『Br. ピウスツキ著作集』には、ピウスツキの研究した各民族に関する他の写真をも収めた『アイヌ民族写真集』が加えられるべきである。これを実現するためには、間違いなく、博物館や古文書庫を博捜し、文献調査を展開する必要があるが、それは大変に骨の折れ、チーム・ワークを要する仕事で、時には国をことにする様々な学術機関所属の数人の人材の参加も必要となろう。

ピウスツキがサハリン流刑時代に着手した博物館学の分野での仕事は、ポーランド帰国の後も続けられた。極東に滞在中と同じく、クラクフ、ルヴフ、ザコパネにいる時、そしてしばしば行った外国旅行の間も、彼は民族学的博物館学の諸問題、野外調査、学術活動の組織化に深い関心を払っていた。ポーランドのタトラ山地の心臓部に位置し、ポーランドの知識人の多くが詣でたザコパネにあって、ピウスツキはRocznik Podhalański (『ポトハレ年報』)の共同編集者だった。彼はまたタトラ協会に民族学部門を創設した(1911)。その綱領には、タトラ山地民文化の写真記録及び

民族学的資料の蒐集とある。タトラ博物館史に対するピウスツキの貢献も良く知られるところである。彼は収蔵条件や学術的形式に大いに意を用いた。彼は博物館の建設委員会の委員ですらあり、新館が、米国、日本、英国、フランス、スイス、ドイツ、オーストリア、チェコスロヴァキア、ベルギーで彼が見た博物館にひけをとらない、近代的で便利なものとなるよう全力を傾けた。

ピウスツキはヴラヂワストークでの博物館体験と専門文献に基づいて、タトラ博物館における民族学的展示の将来像を描きだした。この理論的仕事の他に、彼はそれまでに蒐集された展示品の配列を行った。彼はこれらすべてについて暫定リストを作成し、その多くには番号カードを作り、新規の収蔵品はすべて収蔵台帳へ記帳した。ピウスツキの説得が効を奏し、収蔵品を補充する為の大作戦が展開された。彼は人々に寄贈を呼び掛けたが、彼が熱意と説得力をもってそれを行ったので、数多くの寄贈者が現われた。寄贈者の殆どは山地民で、自分たちの日常生活や自分たちの作った品物が人の注意を引いたと言う事実を誇らしく思う田舎の人々だった。見返りとして全ての寄贈者は博物館への出入り自由とされた。その上で、多くの展示品が購入された。ピウスツキ自身も遠くの村を訪ねるのを常とし、調査旅行から戻る時はしばしば絶品の民族資料を持ち帰るのだった。彼は又多くの写真を撮り、諺や歌や謎などを方言の形で採録した。彼は、サハリン在留時に原住民の間で行ったのと全く同様に、常民の多くと親交を結んだ。

ピウスツキの実践的蒐集家としての仕事のお蔭で、博物館の財産が増えて行った。この地域で民族資料の蒐集をすると言う彼の考えは、彼が外国へ出た後も続けられた。しかし、タトラ博物館に民族学の常設展示を組織化するまでにはなお多くの時間を要した。そのためにピウスツキは多くの労力を割いた。彼は国外からもなおザコパネへ手紙を書き、助言をし、注文をつけ、この展示に対する大いなる展望を語った。彼の手紙には一般的注記のほかに、個別の実践的問題解決のための助言も含まれていた。例えば彼は、小展示室、数多くの作業室、研究用図書室、そして収蔵庫兼作業場を要求していた。彼がスイスに滞在した時は、歴史、考古学、生物学、芸術と言った数部門を擁する地方の小博物館を好んだ。彼は同様な機関を国内に設置するよう提言している。ついには、ロンドン、パリ、ブリュッセル、ウィーンの博物館を歴訪して研鑽を積んだ後で、ブリュッセルから「タトラ博物館について（民族学部門の創設）」と題する長い覚書を送っている（1913）。この覚書はザコパネのタトラ博物館の管理部宛に送られた。これは後に、博物館の管理問題を論じた第3章が追加されて、ピウスツキ自身が編集の *Rocznik Podhalański* [第1巻] に収録された。1914年の第1次大

戦勃発が刊行を妨げた。ピウスツキは当時外国にいたが、この論文を『ザコパネにおける T. ハウピンスキ博士記念タトラ博物館。民族学部門管理の任務と方法』（クラクフ、1915）と題する小冊子の形で出版した。出版の費用は彼自身が支弁した。

この論考は、明晰な講演の形式で記された3章だての論文である。それは、民族学及び民族学博物館の使命に関する必須の情報を論じた平明な論考である。そこではまず、或る種の愛国の訴えである総論が次のように開陳されている。「タトラ山地に強力で活発な民族学研究機関を創設することは、押し付けられた人為的境界で分割された民族を糾合するのに役立つだろう。」ピウスツキはまた次のようにも記していた。「3年間、私はヴラヂヨストックの大博物館で主事を勤め、日本、米国、英国、ドイツ、オーストリアと言った様々の国々のいろいろな博物館を訪ね、そして今年、我がタトラ博物館をすでに念頭に置いて、プラハ、スイス、ベルギーで博物館視察を試みた。私は、博物館の管理論に関する専門書、論文、研究を読んでいる。従って、自分の意見を具申するのを義務であると私は考える。」

論考は、民族学の一般原則及び民族学博物館の機能を論じた序論を含む。彼が記述科学としての民族誌と、相異なる民族学的領域のデータ比較を行う民族学とを明瞭に区別している事は、社会人類学の見地（ピウスツキはこの領域で仕事をした）から重要である。彼と同時代の民族学的博物館が或る国ではより早い発達を遂げ、より広い目標を掲げている事を彼は強調している。ピウスツキは又次のように記す。「民族学博物館や比較民族誌、即ち民族学（ドイツ語の Völkerkunde）の博物館の目標は、地理的原則ないしは比較の原則で陳列品を分類する事によって、全世界のヒトと民族を理解する可能性が作り出せるような資料を蒐集し、展示するところにある。」

ピウスツキは民族学博物館の機能を力説する中で、ヒト及び地理的環境とヒトとの関連性が最大の問題である事を強調する。これらの関連性は所与の民族集団の文化の性格を条件づけるからである。これは、カール・リッターやエリゼ・ルクリュ（『ヒトと大地』（1905）の著者）、H. T. バックル（全文明史を物理主義的に説明しようと試みる）と言った学者に典型的であった、ヒトと自然の関係に関する非常に人類学的な考え方を彷彿せしめる。

第2章でピウスツキは、博物館展示、教育用教材、収蔵品台帳及びカード、それに陳列品の保全方法に対する彼の指示を与えている。博物館展示の基礎として彼は科学的、実践的、美的要件を助言する。彼は如何に展示すべきかを提示し、民族衣装の展示のため人体模型の利用は好ましく無いこと、また明確な特徴を具えた対象物の重要性及び展示の論理を力説する。教育用教材とは写真、図表、スケッチ、地図等の事で

ある。彼は写真を撮り、収蔵台帳や検索カードへ記載する事を通じて、コレクションの総合的記録化を提案する。彼はここでドレスデンの民族学博物館で使用するカードの実例を引いている。彼は又博物館が教育的催事を企画し、講演や映画会を実施する事が必要だとも述べている。

次に彼は、収蔵品の保存問題を検討し、この道の権威、ベルリンの民族学博物館のF. ルシャン教授に言及する。彼はさらにフランクフルト、ドレスデン、ベルリンの博物館で使用されている薬箱の実例を紹介し、末尾には、もっと特殊な問題を取り扱った研究の文献目録を掲げている。歴史的記念物の保存に関する現代の知見に照らしてみても、ピウスツキの見解は概して正しく、彼が博物館学に精通していた事が分かる。

これら技術的な所論の後で、ピウスツキはタトラ博物館の民族学展示の将来像を素描する。それが非常に特殊な分野であるにもかかわらず、著者はそのテーマに関して該博なる知識を有する事が良く分かる。彼の提案をタトラ山地に関するものに限るならば、次のような諸問題を展示に含める事が必須と彼は考えている。

1) 畑や森の仕事、家事と言った人々の全活動、2) 農業とその歴史的発展、3) 農業との関連では、山地に特有の牧羊業と酪農を加えるべきである。4) 山仕事、5) 工業と手工芸、6) 運搬、7) 伝統建築、8) 家財道具及び家具、9) パン及び料理、10) 衣服、11) 技芸、12) 音楽、13) 美術、絵画彫刻、14) 遊戯及びゲーム、15) 習慣及び儀礼、16) 宗教及び信仰、17) 法律、18) 経済及び社会的事象、教育及び学校、19) 民間医療、20) 人類学及び人類地理学、21) 郷土史及び人口問題、22) [ストックホルムの] スカンセン野外博物館方式の展示。

ピウスツキ論文の終章では、提起された綱領の実行をめぐる様々な問題が取り上げられている。彼は様々な分野の専門家との協力、また様々な学会及び大学との協力をも提案する。彼はまたこの展示のための適切なる管理運営の重要性を指摘し、学術及び啓蒙事業では学芸員が中心的調整役として采配を振るべき事を力説する。要するに、ピウスツキの覚書は、その論点及び実践的助言に関する限り、重要文書なのである。それは、民族学的博物館学の問題に通暁した専門家集団のうちへ、このアイヌ文化研究の先覚者を加える事を可能とする。博物館学に長足の進歩をみた今日、博物館学とその領域での実務において、この知識分野の歴史を代表する卓見の体現者でありながら、時として忘却されている人々を想起する事は、正当でありまた必要でもある。民族学博物館と言う形式は、ヨーロッパにおいて極く近年に発達したものである。周知のように、19世紀の博物館はすべてかなり一般性の高いコレクションを収蔵していた。

クチンスキ 博物館学の実務家及び理論家としてのプロニスワフ・ピウスツキ

それに引きかえピウスツキはアイヌ及びニヴフの許で展示品を蒐集し、それをヴラヂ
ヲストークの自分の博物館へ収めたり、ペテルブルグの博物館へ送ったりした。この
仕事を彼は流刑から戻った後も続けたのである。しかもこの時は、実務に携わったば
かりでなく、博物館学の理論的な諸問題とも取り組んだのだった。